series Salamander in the circle

リ・コンストラクション

第五部

第二十八章

Damage

峯村　明

リ・コンストラクション

登場人物
28・Damage
271.
272.
273.
274.
275.
276.
277.
278.
あとがき
奥付

登場人物

桧山 健	Ｈ＆Ｌ財団・財務部門勤務
〃　ひろ	健の妻
サーディク	エドミールのステージネーム
竜門渕 優美子	メルノ
レル・ヴァリス	Ｈ＆Ｌ財団・医療チームのリーダー
ヘルガ	医療チームのメンバー
ベネトナシュ	死神

28・Damage

271.

財団建物は古い城を改造したものだがだいたい左右対称になっている。右翼には本部の機構が、左翼にはスタジオ、劇場、宿泊施設、居住区がある。正面奥のバンケットホールは建物から突き出す形になっており、周囲を瀟洒な庭園が取り囲んでいる。その正面奥のどこかでなにかあった。

館内放送は職員は後報があるまでその場にとどまるようアナウンスしている。防火シャッターが次々と降りて館内を分断していく。だが火災ではないことを職員たちは気づいていた。火災報知器と音が違ったからだ。館内になにごとか異常事態が起こり、職員以外の一般人を保護する施策がとられている。その時間、芸術部が劇場で夏季ワークショップを行っていた。

耳障りな警報音が鳴り響くなか、ひろはひた走った。シャッターの内側に一般人が取り残されていないか保安部が確認に走っている。その彼らといっしょに。「息子が中にいるかもしれない！」と口走りながら。

バンケットホールに向かう廊下の角で思いきり誰かにぶつかって、相手はよろめいた。
「健！？」「おまえか！！」
健が地下駐車場から上がって来たところへ体当たりしてしまったのだった。
「ご、ごめん！！」「気にするな、それより、早く！　どこかに落ちたはずだ！」

今日はなんの予定も入っていないホールは入り口は閉じられている。しかし、ここだ、この奥でなにかあった。保安部の係員が這う這うの体で駆けつけ、持参の装置でロックを解除しようとする。保安部のモニターでも、この場所が真っ赤になっていた。しかし、開かない。モーターが唸るだけで、ドアは開かない。保安員は「非常口へ！」と叫ぶ。「非常口なら手動で開きます！！」
非常口へ駆けつけると、作業着姿の女性が非常口を豪快に蹴っているところだった。ホールの構造全体が歪んでしまったらしく、非常口も開かない。健といっしょに駆けつけたXが「どいてください」と非常口の扉に二度三度と体当たりする。

　早く開けて！　お願い！　気持ちばかりが焦り、ひろははらはらと見守る。「パウジーニさん！　ほかに入り口はないんですか！！」と健が怒鳴っている。「外からなら！　テラスを破れば——！！」

　ぐしゃんと妙な音がして、非常口が開いた。作業着の女性とXは同時にうっと口を鼻を押さえる。中が見通せないほど粉塵が立ちこめていた。天井はぽっかりと穴があき、石造りの壁の半分くらいが崩れている。見るも無残な有様で爆発があったといってもいいような光景だったが、火の気もそういう匂いもない。

　ひろは先行するふたりを押しのけるようにすり抜けて中に踏み込んだ。ランニングシューズの靴底がじゃりじゃりと鳴る。「マミヤ！　足元気をつけて！　ガラスが割れてるわ！」

　ひろは迷わず、「真！」と呼んだ。

　どこかで衣擦れのような音がした。はっと振り向くと、うめくようなすすり泣くような細い声。
「——真！？」
「……ママ？」
「真！　どこにいるの！？」
　瓦礫と粉塵の中でなにか動いた。
　真はなにかを持ち上げるようにして瓦礫の間から頭をのぞかせた。「ママ！」泣き声で母親を呼ぶ。「助けて！　ママ！」
「今いくわ、真、動けないの……？」
　床に転がる壁だの天井だのの残骸を踏んだりまたいだりして息子のそばへ行こうとすると、真はもがき、自力で這い出して立ち上がった。
「よかった！　ケガはない！？」
「助けて！　ママ！　助けて！！」
「どうしたの？　どこか痛いの？」

　真はそこにいるのに——気持ちの悪い胸騒ぎ。立ったまま泣きじゃくっている息子を不審に思いながら手を差し出して抱き上げようとしたとき、息子の足元が目に入った。ひろは一瞬、絶句し、自分の悲鳴を他人のもののように聞いた。

発作のように悲鳴があふれて止まらない。足元に広がってくる血を涙にかすむ目がみている。

272.

「パパ――」健は震えてしゃくりあげる息子の頭を肩に押し当てて、「おかえり」と言ってやり、まだ悲鳴をあげているひろごと、作業服の女性に任せた。
　瓦礫を素手でどける。欧州は地震がおきない地盤の上にあるため、建物を鉄筋で補強するというようなことはない。ほとんどが石、あるいは石様の素材だ。
石の下からイリチヤの全身があらわれてくる。

上着を脱ぎ、ゆっくり膝をつく。瓦礫の中に横たわっているイリチヤにかけてやるつもりだったが、正面に膝をついた男の手がのびてきて、健の動作を遮った。

　健は呆然と呟いた。「片方の腕が――ない」
　本来あるはずのものがないというのは、思考が停止するようなショック。
　正面の男はうなずき、「大丈夫、生きてる」、と言った。彼もまた作業着に編み上げブーツといった格好だ。言いながらケガ人の体のあちこちに触れ、それからイリチヤの頭をそっと持ち上げ、健の上着を丸めて頭の下に入れた。「ヘルガ！　コンテナをこっちへ回して。ケガ人を収容する」

　頭を持ち上げられた時、イリチヤの意識がいっときもどった。
「イリチヤ！　わかるか、オレだ！」
「あまりしゃべらせないでください。どこが傷ついているかまだわからない」

　しかしイリチヤはなにか言いたそうだ。
「なんだ、医者はしゃべるなと言ってるが」

　イリチヤは荒い息を時間をかけて整えてから言った。「――目測まちがえた」「さいてー」

　健はあきれてため息をついた。「おまえなあ」

　聞こえないような声で「真は――？」と問われ、健が「真は無事だ。ここは"うち"だ、安心しろ！」と応えると、みるからにほっとした様子で息をついた。

「腕、死神に持ってかれちゃった。取り返しに行かなきゃ――」

「元気になってから考えろ」

「う……ん……」イリチヤはまた意識を失った。

「ドクター」
「はい？」
「腕、取り返したら、くっつくのか？」
「取り返しに行くつもりですか！？」
「……」
「無茶なことは考えないで！　だいたいこの出血、すぐに輸血をしないと！！」

　どこからともなくストレッチャーが現れた。イリチヤはシートに包まれ、ストレッチャーに移された。驚くほど手際がいい。誰もこの血の海を目の当たりにして、顔色ひとつ変えない。

「あの大きなごつい車はなんなの？」ひろは作業服の女性に尋ねている。彼女たちの落ち着いた態度はひろにも伝染したようだった。
「医療専用車両よ。独自の電源を持っていて、どんな場所でも治療ができる。ちょっとした手術もね」
「――医療専用――」
「ええ。財団の医療チーム。リーダーはレル・ヴァリス」

273.

「彼のケガは左腕欠損、両目にガラスの細かい破片が入っている。あとはどうということのないかすり傷。問題は血液です」

「彼のは非常にまれな血液型で、便宜上、O型の亜種に分類されますが、抗体の関係でA型・B型はもちろん、O型の赤血球も輸血すると凝集反応を起こしてしまう。こういう場合、輸血には原則として同じ血液が必要です」

「そんなの！　無理だろ！」

「ええ、ですから、同じ型の赤血球製剤を輸血するしかありません」

　健は険しい表情でそっとため息をつく。なにを言っても始まらない。だいたいイリチヤは魂体でありながら、血が流れる生きた生物体でもある。それに、もしヒューダ―の記憶が正しければ、爆発的な力を発揮する故に婚姻を禁じられた、異種族同士のハイブリッドなのではなかったか。そのことが彼の血をより特殊なものにしているのかもしれない。そんなことを考えながら、健自身の血液が使えないか、検査を申し出る。

　レル・ヴァリスはやはり難しい表情でうなずき、採血の準備をする彼のスタッフを見遣りながらつぶやいた。「あの血液があれば――」、と。

「あの血液？」

「イリチヤとは真逆の意味で、とてもまれな型で。相手がどんな型でも関係ない。どんな血液型にも適合する。副反応が起きないどころか、相手の血液を活性化させてしまう。つまり、他者に輸血すると、傷がたちどころに治ってしまうというんだ。ぼくはかつて、魔法力によって患者の組織を活性化させ、ケガを直したことがあるけど、それと同じような作用を持ってるんだ――」

「それはまた夢みたいな話だな」

「ああ。あまりにも夢のような話だし、すると、持ち主の身が心配にもなる。いろいろな意味でね」

「その、持ち主というのは？」

「さる高貴な一族の男性、それも直系の男性のみが受け継ぐらしい。たぶん、女性が受け継ぐと際限なく広まってしまうからじゃないかな、そしたら、地上最強の一族ができてしまう」

「へえええ。で、その高貴な一族って？」

「黄金門の王家」

　健は目で探した。ボディーガードのXを。Xもまた驚愕の目でレル・ヴァリス医師を見ていた。

「やつだ！！」、と叫んだのは健ではない。Xである。

Xはものを言う時間さえ惜しんで部屋を飛び出して行った。

274.

Xは館内を走った。館内は通信規制がされているのでモバイルが使えない。直接行って、本人をつかまえ、連行、いや連れ帰らなくてはならない。途中で何かが足もとを走り抜けていった。ネコたちだ。盗み聞きでもしていたのか、Xが走っている理由を知っているようだった。体が延び縮みしてまるで弾丸のようだ。さすがに全力疾走するネコには追いつけない。誰でもいい、とXは思った。マスターを取り押さえてくれ、頼む！！

*

劇場内では学生たちが配られた夕食をとり終えていた。
H＆Lスタッフによると、今夜はもしかしたら宿舎に戻れないかもしれないという。少なくとも、十時の消灯までは学生たちとその保護者をなんとかしなくてはならないわけで、サーディク先生は全員集めて相談を始めたところだった。

「さて、諸君の方からなにか希望はあるだろうか……」と言いかけたところへ、ネコが二匹、飛び込んできた。

「こらこらこらおまえたち、ここへ入ってはいけないと言ってあるだろ！！」
というのは、ネコアレルギーを持ってる人がいるとまずいからである。しかしネコたちはにゃんにゃんにゃんにゃんと不穏な鳴き声をあげながらサーディクに絡みつき、スーツに爪を立てて、前から後ろから、駆け上がろうとする。

「痛い痛い痛い！！　こらやめろ！！　いい加減にしないと、晩飯ぬきだぞ！！」
そんな脅しはネコに通用しない。歓迎してくれるところはいくらでもある。
救いの手を差し出したのはユミコである。「あなたを呼びに来たのでは？」
ネコの一匹がユミコの足元に身を投げだして転げまわった。「ほら。やっぱりそうですわ」

そこへようやくXが現れた。情けなくも息があがってしまって言葉にならない。肩を上下させ、館内の奥を指さし、来てくれ、とジェスチャーする。

　同僚の切羽詰まった様子を察したYは、「なにか緊急の用件のようです。あとは私が引き受けますから、行ってください。さあ、貴女も！」ユミコのハンドバッグと書類鞄をとって押し付けた。
「え、あたしも？」
　戸惑っているうちにサーディクはネコたちに追い立てられ、ユミコはXに腕を掴まれた。ユミコは関係ないという気はしたのだったが、もはや成り行きであった。

275.

　バンケットホールの庭に面したテラスがあった場所に、見たこともない大型車両が止まっていた。サーディクはその中に無理やり押し込まれた。嫌も応もない。彼を誘導する役目を終えたネコたちは、中に入ろうとはせず、庭へ出て行き、芝生の上を犬のように転げまわった。

　サーディクを出迎えたのは白いマスクの上に真っ青な目を光らせ、輝く注射器を片手にした女性だった。「どうぞ、落ち着いてください」、と彼女は澄んだ声で言った。

「落ち着かせてくれ！！」
「深呼吸して。吸って、吐いて。すぐに済みます。詳しい説明はのちほど」
「先に説明しろ！！　私を何様だと思ってるんだ！！」

　じたばた暴れるマスターを簡易ベッドにおさえつけようとしているXをつられて手伝いながら、ユミコは車内に目を走らせる。
「移動病院？」さすがは病院理事長である。「ケガ人がいるのですね？」、と採血しようとしている女性に尋ねる。「もしや――イリチヤ？」

　女性は、えっ、とユミコをみた。「そうなのですね！？」、とユミコ。
　女性はうなずいてみせ、言った。「マダム、どうぞ手を握ってさしあげて。その方が落ち着くでしょうから」

「いや、あの、このひとは……」
　サーディクは抗ったが、Xに手を握られるよりはいいと思い、されるに任せた。ユミコは両手でしっかり握ってきたが、心はすっかりどこかへ行ってしまっていた。

　採血が始まると、女性はほっと一息ついた。
「お元気そうでなによりです。バイスロイさま」

「――ヘルガどのか――」

「私たちはＨ＆Ｌの医療チームです。このたび、機材のメンテナンスに戻ってまいりましたら、イリチヤのケガに遭遇した、というわけです」

「……ホールが跡形もなくなっているが、ここが事故現場？」

「桧山総裁のご子息、真くんがベネトナシュという人外のモノに誘拐されたのです。イリチヤは真くん救出に赴き、脱出の際にベルギー空軍のヘリに銃撃され、とっさにＨ＆Ｌ本部へ瞬間移動した。ホール瓦解はそのためです。真くんはほぼ無傷でしたが、イリチヤは大ケガを……」

　桧山健はいつの間にか『総裁』になっている。ニックネームにすぎないが。
　サーディクの手を胸元でしっかり握ったまま、ユミコは尋ねた。「どのような……ケガなのでしょう？」

「腕を、片方」ヘルガは声をひそめてはっきり言った。目は物思わしげにユミコをみる。

　ユミコは相手のまなざしを受け止める。（どこかで会ったことがある――？）

　見合っているうちにヘルガは思い出した。
（ミツハさま――ミツハさまだわ！　イリチヤに生き写しのように似ていらっしゃる！　今も変わらない！）

　そのひとがなぜこのタイミングでここにいるのかしらとヘルガは不思議に思う。そのうえ、バイスロイといっしょに。だが詮索などしている場合ではない。

　なんと呼べばいいかと訊かれ、ユミコです、とユミコは名乗った。

「ユミコ、あなたがイリチヤを想う心、それが彼に力を与えます。どうか祈ってあげてください」

276.

　手術室へ続く廊下の向こうでドアが開閉し、尋常でない騒ぎが漏れ聞こえた。ヘルガは厳しい表情で立ち上がり、手術室から出てきた男に鋭く尋ねた。

「どうしたんです！」

「イリチヤが暴れてる。『死神が来た』というんだ」

　ヘルガはじめ、みんながえっ、となった。

「ベネトナシュのやつだ。お見舞いを届けに来たから受け取りに来いと言う」

「お見舞いですって！？」

「どこまでもふざけた奴だ！　受け取るまで何度でも来ると言うんだ！　冗談じゃない！　何度も来られてたまるか！！　サーディク、ちょっとXを借りるぞ、X、怖くなかったらいっしょに来てくれ」

「こここここ怖くなんかありませんよ！　マスター、ちょっと失礼します」

　健は採血中のサーディクをなにげなく見て、あ然とした。美しい日本人女性に手を握られている。その女性は——

「に……西ノ宮さん？」

「桧山さん……」

*

　興味本位にせよなんにせよ、いろいろ聞きほじりたいのは山々だったが、ここは死神のお見舞いをやっつけなければならない。本部のエントランスへ走る健とXの背後で、ユミコは彼は亡くなった娘と学校がいっしょだったのだと懸命に説明していた。

*

「バイスロイさま、理由あって、基準量の上限いっぱいに採らせていただきます。ご協力のほどをお願いします」

「イリチヤに輸血するのか」

「御意」

「血液型は合うのか？」

「あなたがポルタアウレア大公家直系の方である以上、血液型は問題ありません」

「……ふーん？」

「医療界には伝説がありました。ポルタアウレア、すなわち黄金門の血液には特殊な力がある。他者に輸血すると、傷がたちどころに治ってしまうという、魔法のような働きをする、と。
その伝説は事実であると証言してくれた人がいます。バイスロイさま、あなたは刃物で刺されたことがおありですね」

「————」

「事件は深夜のことで、明るくなってから遺体となって発見されました。けれども、ほんのいっとき目を離したすきに、遺体は消えてしまったとか。血が流れていたはずのあたりに陽の光があたると……みるみる植物が芽吹き、赤いひなげしの花が咲き乱れた、と」

「私は刺し殺されて、ひなげしに変身した、というのか」

「見ていた人がいるのです。一部始終を」

「————」

「そのうえ……血液目当てに、あなたの複製を作ろうという動きさえあったとか。
『黄金門の血』にはきわめて特殊な力があると、私も聞いたことがございました。それがどのようなものか知る機会はありませんでしたけれど、医療界の伝説と、実際に見ていた人の証言を合わせれば、なるほど、と思わずにいられません」

「眉唾ものだな」とバイスロイは短く言った。「実証はされてないんだろ？　それでも誰かの命を助けられるんなら、めっけものだ」

「私は、バイスロイさま、あなたがとても誠実で、心優しい方だということ、よく存じておりますわ」

「ふふん、だったらいいな」

　ベネトナシュはＨ＆Ｌ本部建物の正面玄関から入って来た。建物が封鎖された後のことで、異物の侵入を防ぐ作用はあったのかもしれないが、そんなところから訪問した真相はわからない。彼のことだから、館内のどこへでも自由に出入りできそうなのだが。だから真はさらわれたのだし。

　こいつのことを考えだすと雑多なことで頭がいっぱいになってしまう、と健は思う。それとも、そうするのが目的なのだろうか。こいつには他人の頭の中に疑心暗鬼のタネをばら撒くという芸当ができるのかもしれない……

　全身黒い色で統一した服装に、夜にもかかわらず唾広の帽子を目深に被っている。すらりと、というより、ひょろりと丈高く、斜に構え、口元に浮かべた微笑はなんのつもりだろうか。
　見ようによっては、風変わりなアーティストに見えなくもないが……ウィンディの好みがこういう男だっただけだろう、と健は観察を打ち切った。健自身、採血した直後で、足元は少々、ふらついていた。万全の体制とは程遠かった。

「ごきげんよう」、とベネトナシュは朗らかに言った。嘲笑しているようにも見えた。「彼の具合はどう？」

「痛がって泣きわめいてる」

　はあ、とため息をつき、ベネトナシュはかぶりを振る。「強情張らずに手を離せばいいものを。ワタシはどうしようもなかったのだよ」

「手を離せばよかったのは、そっちだろう」
　イリチヤは、片手で真を保護し、片手をベネトナシュに掴まれてしまってどうしようもなかったと言っていた。ベネトナシュのは、『真を手放せばよかった』という意味だろうか。またぞろ、イヤな考えが沸き起こる。背後のXから警告。（挑発に乗ってはいけません！）

　Xの経歴など知る由もないが、ボディーガードであるだけでなく、マスターの秘書的役割も務めているらしい。腕っぷしは強く、体力もあり、ポルシェの運転など、持ち主の健よりスムーズで上手い。文武両道なのだ。このあたり、Ｈ＆Ｌの人間とちがう。見回したかぎり、Ｈ＆Ｌにはこういう武闘派はいない。もし……と健は思う。彼が望むなら、オレが引き受けてもいい。もし、現マスターのもとで働くのがつらいのなら……

「いやいや、ワタシはお見舞いに来たのだった。キミの機嫌を損ねたのなら、謝るよ。なんの関係もないキミとコトを構えるつもりはない。五体満足で傷ひとつない彼を引き渡して欲しいだけさ。はい、これが約束のお見舞いの品」

　ベネトナシュの手に白い塊が現れた。五十センチくらいの長さで、細長い。長方形。白く包装され、白いリボンまでついている。なにげに健はぞくっとした。

「さ、受け取ってくれたまえ」

　Xがつと前に出てきた。「私が」と。ガード対象者に正体不明のモノを触らせてはならない。ベネトナシュは、ぽん、と放ってきた。両手で受け取ったXのリアクションからすると、見た目よりもけっこうな重量があるらしかった。彼の額にどっと汗が浮かぶのを健は視界の隅でとらえた。

（間違いない。これは――）

「渡したからね。くれぐれも大事に扱ってくれたまえよ」

「待てベネトナシュ」

「ワタシは無関係のヒトと話をする権限を持っていないのだよ。ではそういうことで。あ。急いだほうがいいよ」

　ベネトナシュはすでに向こうをむいたままひらひらと手を振り、暗闇のなかへ紛れ込んでしまった。

278.

「ご協力を感謝します」、と執刀医は言った。血液提供者に対して。

「……役に立ちそうかな」

「もちろん！　あなたがここにいなかったら、彼の容態は絶望的だったかもしれない。少なくとも、彼はあなたのおかげで命拾いした」

「ならいいのだが」

　執刀医の傍らでヘルガはこっそり呆れている。さっきは突っ張らかるようなこといっていたのに。でも、こういうところがバイスロイなのだった。彼のたいへんシャイな性格をヘルガはよく知っている。

「それにしても、きみがＨ＆Ｌにいたとはな。父の手術をしたのはきみだろう？　あのまま捕まえておくんだった」

「あいにく、ぼくはまだ学生だったので教授が間に入ってくれた。結果的にそれがＨ＆Ｌに繋がった」

「あのパウジーニというやつだな。今はのうのうとケンの秘書をしている」

　ふたりはどちらからともなく、そっと笑った。笑う状況ではなかったのだけれども。

　ユミコの目には、この執刀医の男は二十代前半にみえる。（この年代ではまだ研修中のはずだけど……）

「ケンが戻ってきたわ」、ふいにヘルガが言うと、コンテナの後部扉が開いた。何重にもなっている一番外側の扉である。それから滅菌し、内部へ入るのにしばらく時間がかかった。

　帰ってくるなり、ケンは言った。「お土産だ、レル」
　執刀医はケンとXが掲げている白いリボン付きの箱を交互に見た。「まさか！」

「そのまさかだ。取り戻しに行かずにすんだぞ。急いでくれ、ベネトナシュもそう言ってた」

「――ヘルガ！　接合手術！　大至急！」「ええ！」
「ケンとXも！　イリチヤは麻酔が効かないんだ、また大暴れするぞ、押さえつけるのを手伝ってくれ！」

　みな、慌ただしく手術室へ消えていく。ユミコはその場にへたり込んだ。

「麻酔なしで！？　腕をくっつけようというの！？　正気！？」

28・「Damage]

29・「」へ続く

あとがき

レル・ヴァリスは第二部の最初の方でいなくなって以来、ヘルガさまは現代編には初登場ですかね。いつの間にかいっしょに行動してるし。ヘルガさまや黄金門の皇帝陛下の地下行がその後どうなったかは、もう言及することはないかと思いますが…ま、彼らはそれぞれいるべきところにいる、ということです。

血液型については、人口の約1%以下の頻度で存在する「非常にまれな血液型」というのがあって、ボンベイ型とか、パラ-ボンベイ型等の名称があり、細かいことはえらく複雑なんで省きましたが、ようするに、輸血には原則として同じボンベイ型の血液しか使用できないとのこと。
また、酵素を使って、A型、B型、AB型の血液をO型に変換する技術というのがあるそうですが、これはまだ実用化されていないみたい。いずれにしても、万全を期して、輸血はほぼ同型同士のみで行われるんだそう。
https://nikkeimatome.com/

さて、あとがきで書くようなことじゃないかな、とは思いつつ。
NHKの朝の連ドラ『あんぱん』が終盤を迎えてますね、筆者、欠かさず見ております。
『詩とメルヘン/ファンタジー』のバックナンバーを何冊か、何年か前まで持ってたですが、いつのころか、手放してしまった。投稿誌で、なんというか、人さまの才能を見るのは辛かったです。詩もイラストもレベルが高かった。「この程度だったらあたしにだって書けるわ」なんてもんじゃなかった！　しかしかほちゃんのこのセリフはきょうれつでしたね！
アンパンマンのマーチを初めて聴いたときの衝撃は忘れられない。この普遍性そのもののような歌詞には泣いてしまう。やなせ氏の作詞ならさもありなん。
どうすれば売れるか、とか、どうすれば読者のニーズにこたえられるか、とか、やなせ氏が考えてなかったわけがない。と思うものの、アンパンマンの本質とは、そういうものを超えたところ、ひとことで言って、普遍性なんだろうな。…愚考。

2025年9月12日　記

奥付

リ・コンストラクション　　第二十八章　Damage

2025年　9月15日初版発行

著者　　峯村　明　E-mail

表紙素材　　イラストAC

制作　　Puboo
発行所　　デザインエッグ株式会社